第4回　彦根市シティプロモーション戦略策定委員会　議事録

◆　日時：2018 年 11 月 16 日（金）13 時 30 分～15 時 30 分

◆　場所：大学サテライト・プラザ彦根（C 教室）

◆　参加者：

＜委員（リスト順・敬称略）＞

出席：上田洋平／小椋昭代／柴田雅美／松居智和／宗田好史／橋本昌子／馬場完之／
丸山武志（アドバイザー）

＜事務局＞

彦根市：シティプロモーション推進課　課長・疋田／同課長補佐・平尾／木田

株式会社いろあわせ：北川／井上

＜傍聴人＞

3 名

1．開会

（委員持込資料「田中元子さんの Facebook 投稿」について）

【上田委員長】彦根は「何気ない風景」や、「喫茶店」に住んでいる人の楽しみがある息づいた街であるとした一方で、キャッスルロードや四番町スクエア、ひこにゃんなどについては、やや批判的な内容であった。この投稿を一つ問題提起として、 先日のワーキング会議の中でも共有した。参加者の反応としては「わかる気がする」と概ね肯定的な意見が見られたように思う。冷静な意見としては「観光」と「生活」は同列で語ることはできないのではないか？というような意見も見られた。

【柴田委員】そういう見方もあると思う。古い街ならどこにでもある当たり前の風景のように感じた。

【事務局：いろあわせ】意外と参加者の皆さんは驚くことなく、当たり前のことのように受け止めた方が多い印象。今回は最後の 5 分間の短い時間でしか話し合いができなかったが、彦根市のシティプロモーションはどうあるべきかとも関りがあり、「もっと話したかった」という意見もあったので、次回のワーキング会議冒頭で続きを話そうと思う。

2．市民ワーキング会議報告

－　第 3 回・第 4 回市民ワーキング会議（共通）

仕事の都合や、病気等で欠席が目立ったような印象があるが、両日共に 30 名近い方にご参加いただいた。

－　第 3 回市民ワーキング会議

前半は市民目線から感じている彦根の魅力や風格のきっかけ探しとして、彦根の熱のある「人」「場所」「コト」探した。人それぞれで様々な魅力が発信された。同じ彦根市民同士でも知らない「人」「場所」「コト」があり、人の発表する魅力を聞いて「こんな場所もあるよね」というように、活発に話が進んだ。

後半はやりたいことの「タネ」を応援することをテーマに、みんながやりたいことの「タネ」を発表し、具体的に形にしていくためのステップを踏むためにはどうすればいいのかについて議論した。

－　第４回市民ワーキング会議

前回のやりたい「タネ」の話を「もっとやりたい」という話があったので、前半はその続きの話をした。まずは３ヶ月以内でできることについて話し合い、具体的なアクションの発表をした。

最後に田中元子さんの投稿を元に、「シティプロモーションとは？」という問いかけをして、二人一組で話し合いをした。

◆次回の市民ワーキング会議

次回は 12 月 5 日水曜日実施予定

３．戦略骨子について

－　①アクションプランについて

◆協働（共走・共創）

今年度の市民ワーキング会議において、活発な議論が行われており、すでに具体的なプロジェクトをやりたいという声も上がっている。初年度は、現状の市民ワーキング会議を元にした「彦根市シティプロモーション推進会議」を設置して、継続的に開催していきたいと考えている。その中で起こる新しい活動の応援や、既存の活動との連携を進めていきたい。

２年目以降の活動としては、応援の形として、ガバメント・クラウドファンディングという仕組みを検討する。直接取組に参画することまでは難しいが、支援・応援したい人＝「関係人口」の増加、また既存の活動に対する新たな資金調達の可能性を広げ、自走できる仕組みづくりを目指す。

３年目以降は次々に立ち上がる新たな取組に対して、市民等が参画応援できるような状態を目指す。

◆熱を伝える場作り

１年目には市民がまちに対する熱や、取組を広めるような場として「彦根未来フェス（仮称）」を実施する。彦根に関わる人が思い描く未来についてプレゼンテーションを行う参加型のイベントとしたい。ここではお互いに刺激されながら、これからどうやって地域を良くしていくかなどについて考えることができるようなものを目指す。

２年目以降には、地域版の未来フェスとして、各エリアで地域の人が主体的にイベントを作っていけるような状態を目指す。これらを牽引する「地域の熱伝導士（仮称）」の育成にも力を入れていく。

◆共感を生む情報発信

彦根の熱を帯びた市民の取り組みによって変化しつつある彦根市を、市内外にリーチさせる情報発信が必要である。

１年目はまず、市の広報媒体（市公式 WEB、広報ひこねおよび SNS）による情報発信。それによって、市民の共感、感謝、応援意欲を獲得していく。

２年目以降は協働の成果として、市民主導型の情報発信媒体の運営がされていく状態を目指す。これらの取組を通じて、情報が随時発信されている状態を目指す。

●【柴田委員】未来フェスは何回するのかなど、具体的にどんな形の未来フェスをやるのかを知りたい。
●【宗田委員】予算が厳しいのだろうなという印象。その中でなんとかしようと一生懸命な気持ちは伝わってくるが、市民ワーキング会議などの協働を進める上では、行政がどこまで情報を公開するかが重要だと思う。「市役所の人にサポートして欲しい」という意見があるが、市役所の人は万能ではない。その事を包み隠さずに伝えていくことが協働の最初の一歩。知らないこととか間違っていたことを気軽に認めて、市民との信頼関係を築くことで、一緒に頑張っていきましょうという雰囲気を作っていけると、本当の意味での協働がなされると思う。
●【上田委員長】無謬性(「役所の人は間違えない・失敗しない」という幻想)をなくす、市役所と市民という壁をなくした上でなければ協働はできない。
●【宗田委員】ある市職員が3日徹夜をすれば完了する仕事があるとして、その仕事はやるべきかどうかという問題がある。もし市役所の人が「もうこれ以上は働くことができないから、ごめんね」って言った時に果たして市民は許してくれるのかどうか。時代の流れから言ってそれは許されるべきだと思うが、これが福祉や病院の職員が患者などを前にしたときにも言えるのかどうかなど難しい場面もあり考えていく必要がある。
●【馬場委員】公務員の働き方に関しては、欧米では公務員にもストライキ権が認められており、国民のコンセンサスがあるが、日本ではまだまだ理解が成熟しているとは言えないので、公務員の働き方改革が進まない現状もある。資金調達の方法としてクラウドファンディングを使用することまでは理解した。ただ、その集めたお金をどのように使うのかが重要なのではないかと思う。それでこそアクションプランと呼べるのではないか。
●【事務局:いろあわせ】クラウドファンディングは、“全体でお金を集めてからそれを分配”するのではなく、募集の時点から“プロジェクト単位での募集”というイメージをしている。個別のプロジェクトに対してクラウドファンディングが立ち上がり、それを市がバックアップするという形をとる。形式的には一旦自治体にお金が入って、各団体に活動費用を渡すことになると思う。
●【丸山委員】(米原市等では)完全に個人でクラウドファンディングの立ち上げをしてもらっています。例えばお祭りをするためのお金を集めたいという方がいたとして、その方が個人としてクラウドファンディングを立ち上げる。市はそれのバックアップをするという形になる。WEB が苦手な方のために広報のやり方をレクチャーするなどの方法で支援をしている。お金のやり取りはまったくない。ガバメント・クラウドファンディングは間に市が必ず入るので、その点は違いがある。
●【宗田委員】「気楽に参加応援できる仕組みづくり」と書いてあるが、これに加えて「支援できる」仕組みづくりと呼ぶべきではないか。市民活動のレベルであれば「今日の会場費やお茶代は〇〇さんが出してくれました」というレベルの支援から始まるのが良い。それを記録に残すことによって市民自身の主体性と、支援の意識を育てる。そうやって集まりがあるときには”割り勘”方式で支援をしていく。その延長線に「もっとお金を集めてクラウドファンディングをしよう」という動きが生まれてきて、お祭りができる。小さいことから大きいことへと向かっていくような仕組みを作っていくことが良いのではないか。

●【橋本委員】働き方改革とは「事業をもっと良くしていくために 100%以上に頑張る」→「いやできる範囲でやっていこうよ」という考え方の変化のように感じるところもあり、よりよいものを目指さなくてよいのかと実

際戸惑っている面もある。市がどこまでオープンに情報を出すのかについては、まず市は“どこまで知っているのか”ということが問題になるし、実際すべてを知っているわけではないということを皆さんに知っていただかないといけない。ただし、知った情報については、もっと上手に市民に伝えないといけないと思っている。そうやって開示していくことで、市民活動の“割り勘”が機能するのではないかと思う。行政の役割は仕組みを作ることであると考えているので、ガバメント・クラウドファンディングを検討しているのだが、その仕組みを市民レベルで自由に使えるようになることが目指すところである。

●【事務局：市役所】宗田委員が例に挙げられた会場費とは、彦根市シティプロモーション会議を実施する場合の会場費用のことか？
●【宗田委員】（質問に対して）それも含む。クラウドファンディングという言葉を使わなくても、少しずつみんなが支援しあえる仕組みづくりをしたい。その小さな一歩として「今日のお茶代は〇〇さんがだしました」というレベルから進めてはどうかと思う。大きな戦略でいえば、今、どの自治体も行財政改革の中で、例えば地域の公共を担ってきた公民館にも予算が出せなくなっている。これまでは税収があるので公民館に係る予算も出せたが、今後は行政からの予算がない中で地域の公共を地元で支えて欲しいという構図をこの国は進めていこうとしている。（市民が）「確かに考えてみれば、大げさな公民館を作って維持するよりも、各自で会場費を負担したり、自宅の座敷を開放したりした方が、まちづくりができるよね」という仕組みになってくる方が、身の丈に応じた協働が進むのではないか思うし、そういう理念に基づいて、クラウドファンディングも考えていく必要がある。

●【事務局：市役所】統一した支援のあり方ではなく、規模に応じてその場に合わせた関わり方や支援方法があるということか？
●【宗田委員】いきなりクラウドファンディングなんて言ってもお金は集まらない。その原因は、クラウドファンディングという言葉を知らない、寄付するという文化がない、まずそこに支援が必要だと思っていない。だからこそシティプロモーションを進めようとしているはず。（※補足　市民が自分ごととして、まちの課題に取組む文化、土壌があるのであれば、あえて彦根というまちをプロモーションする必要は無いはずという考え）
隣の人に急に１万円を寄付して下さいとお願いしても、日本では難しいのが現実。だからもっと想像しやすい小さいレベルから、まずは最初の 1,000 円をどうやって出してもらうかを考えていく必要がある。

●【松井委員】3 つの柱のそれぞれが作用しあって、サイクルになっていくと思うのだけれど、（配布された）この表からはどのようにサイクルが繰り返されていくのかが見えない。そのサイクルについて考えがあれば教えてほしい。また、クラウドファンディングはどのような見せ方をしていく予定かも知りたいです。
●【事務局：いろあわせ】サイクルについては前回の資料を見ていただける方がわかりやすいかと思います。（前回資料を見ながら）この表で言えばまずは協働から始めて、場作り、発信が良いかなと考えている。前回の議論でも「どこから始めても大丈夫ではないか」「逆のサイクルの流れもあり得る」という話もあったので、シンプルに「どこから始めるのが一番やりやすいか？」と考えて協働からとした。
本年度の市民ワーキング会議がすでに第０回目の協働として始まっているように考えている。その中で具体的なプロジェクトをやりたいとの声も上がっているから、それを次年度以降も継続・拡大していくようなイ

メージをもっている。今活動している人の熱を伝えるような場作り、場を伝えるための情報発信、「そんな事ができるんだな」と知って協働していく。そういうサイクルのイメージをもっている。
●【事務局：市役所】たしかにクラウドファンディングは時期尚早だったかもしれない。活動に直接参加していない人に、どのようにして参加を促すのか、どのような方策がいいのかについて考えている。たとえば、現在、市内の石田三成ファンが団体をつくり佐和山山頂のベンチを新調しようとされているが、そのベンチを山頂まで運ぶ人員を確保、必要なお金をどう調達しようかと議論されている中で、全国から三成サポーターを募集しようという話になっており、そのような形をイメージしている。
●【宗田委員】プロジェクトごとに必要となってクラウドファンディングを頼りにすることはあり得るが、アクションプランの中にクラウドファンディングを組み入れる（頼りにする）と上手くいかなくなるかもしれない。
●【馬場委員】（宗田委員と）同じことについて私も気になっていました。シティプロモーション全体のお金の集め方としては何を考えていますか？（※補足　例えば今日の会議室の費用などの最低限の運営費用）
●【宗田委員】まずはお金が出るわけじゃないけど、会議に出向いてくれるのが第一歩。その延長線で少しずつお金の支援をする土壌ができてくると良い。
●【事務局：いろあわせ】来年度は彦根市も非常に予算措置が厳しくなると聞いているが、目線を変えてそれをチャンスと捉えたい。「お金が出せない。そして働き方改革があるから、仕事もできない。」ということを宣言した状態でのシティプロモーションをすることで、市民自身が危機感を感じて行動せざるを得ないように感じるのではないかと考えている。前回の戦略策定委員会のときのメモとして「ルールを作るとしても、役所を縛る。」「市がみんなを巻き込むのではなく、住民が乗っかりたくなるようなものにすること。」の 2 点を大切にしたうえで、3 年間の戦略を考えたときに、市役所がやること（できること）に制限があることを伝えることは大切だと思う。

●【宗田委員】市役所の援助がなくても、まちづくりをしたい熱意がある人は、自らの力で資金を調達すればいい。町の社長に支援してもらうとか、ローカルな人にしかできない方法があるはず。そういう資金を調達するためのスキルが、まちづくりに参加する人には必要だと思う。「まちづくりは市役所がお金を出してやるべき」という考え方ではなく「自分たちでお金を調達してまちづくりをしよう」という考え方を広めることがシティプロモーションの中心になるべきだと思う。そうしたことを前提としたときに、ガバメント・クラウドファンディングと書いて、それでなんでも解決しているように見えてしまうのはやめたほうがいい。
●【委員長：いろあわせ】「資金調達も自分でやるひと」というのが、資料にある「彦根の熱伝導士」のイメージと近くて、人を巻き込んだり、場合によっては資金調達を行うことは、スキル的な面もあるので、その人を育成していくのも重要だと考えています。

●【丸山委員】クラウドファンディングはあくまで手段である。クラウドファンディングをやれば何かが解決するのではなく、やりたいことがあってその資金調達の選択肢としてクラウドファンディングがある。
今の協働のところの書き方は、「市民を巻き込んでやる」って風に見える。市が主体でやると「目的・意図・ゴール」を設定しないといけないし、それだと本来の「市民の自主的な活動」とは相反する。もう少し見せ方を変えて、市民が積極的に動いていき、市はそれに巻き込まれていくような仕掛けにしないといけないと思う。
●【事務局：市役所】（資料②推進体制についてを見せながら）本年度の市民ワーキング会議のメンバーを

主体とした「（仮称）彦根市シティプロモーション推進会議」を発足し、そこに彦根市が連携していくイメージをしている。
●【事務局：いろあわせ】そのときに難しいのは、場（会議）に対して名前をつけたときに、だれがその場を取り仕切るのかで外から見れば「誰かが、誰かを巻き込もうとしている」意図は感じさせてしまう。
●【丸山委員】そのとおりで、その主体は市役所ではない方がいいと思います。
●【事務局：いろあわせ】主体が市民団体に変わったら、見え方は変わるのでしょうか？結局市民からの視点だとあまり変わらないのではないかとも感じる。
●【丸山委員】変わると思います。見え方に関しては、市が旗振りをしないことと、それを見せることが重要だと思います。

●【柴田委員】今日の話を聞きながら、これは市民活動センターの仕事なのではないかと感じた。シティプロモーションと市民活動センターは別物だと思うので、無理やり市民を市民活動に参加させようという方向性には違和感がある。市民活動センターは任意団体なので、協力する形で一緒にできればいいのかもしれない。社会福祉協議会とも役割が被ることがあるかもしれないと考えると、3つ目の団体ができることは意味が無いのかもしれないと感じる。
●【宗田委員】将来的には融合していくことがいい。この種の組織というものは最終的にはなくなっていくもの。それを前提に何年間続く組織にするのかも考える。最終的には社会福祉協議会や、市民活動センターに吸収してもらうようなつもりをしたらいい。
●【小椋副委員長】ガバメント・クラウドファンディングという仕組みを使うことが、市民が自走するまちづくりとは相反するのではないかと思った。
もう一つ、未来フェスの話がありましたが、そのイベントの中でお金を生み出して、それをまた次のイベントへつなげていくような仕組みを作っていけないのか。市役所の資金に頼らずに、彦根の市民が主体的に作ったイベントでできたお金で、また次のイベントができると素敵だなと思う。
●【事務局：いろあわせ】（柴田委員に対して）あくまでもシティプロモーションとは、「プロモーション活動」だと考えていて、その対象が市民活動なのではないかと考えている。これまでの彦根城や、歴史的資産をメインにまちづくりを進めてきた彦根市の考え方に、置いてかれていると感じていた市民が元気になることが彦根市を盛り上げていくことであり、ひいては人口減少を食い止めることや、世界遺産登録にもつながるのではないかと考えている。そのためのプロモーション活動が、今回のシティプロモーションという事業だと思っている。協働だけをクローズアップすると、たしかに市民活動センターと同じに見えるが、本質的に重要なのは場作りと、情報発信だと考えています。
（小椋委員に対して）市民活動を応援する黒子としての市役所の在り方がガバメント・クラウドファンディングという形であって、応援する姿勢と矛盾はしないと思う。
イベントで自走できるようにするのは賛成だけれど、市役所として実際にできるのかということに関しては疑問がある。
●【橋本委員】市は主体ではなく、市民の主体的な活動がいかに展開されるのかということを考えすぎると、アクションプランは作れず、具体性がなくなってしまう。ただし、お金（予算）の事を考えると具体性も必要となる。なので、プランへの書き方としてはもっと“応援する姿勢”について書いて欲しい。あくまでも行政は黒子であり、主導するわけではないという姿勢。

－　②推進体制について

市役所がメインではなく、市と市民が協力する形で「（仮称）彦根市シティプロモーション推進会議」を発足。参加メンバーとしては、現状の市民ワーキング会議のメンバー＋αを考えている。

「（仮称）彦根市シティプロモーション推進会議」は彦根未来フェスや、その他のイベントの主体として活動する。

－　③ターゲットについて

熱量ごとのターゲット分けを①～④で表記している。

✧　ターゲット①：すでに彦根に魅力を感じており、何かしらの市民活動を実施している。
核になる層。推進会議への連携要請、熱を伝える場作りへの参加を促す。対象は市民アンケートで参画意欲に 10 を付けた人。市民の約 3%に当たる。

✧　ターゲット②：彦根の魅力を感じていて、機会（誰かの後押しなど）があれば地域活動などに参加したいと思っている。
推進会議への参加要請、熱を伝える場作りへの参加を促す（まずは熱を感じてもらう／聞いてもらう）。情報発信については情報を見聞きしてもらう。対象は市民アンケートで参画意欲に8または 9 を付けた人。市民の 1 割弱。

✧　ターゲット③：地域活動に興味は無いが、地域のために活動している人は応援したいと思っている。
応援の方法としてクラウドファンディングという手段を紹介、未来フェスには足を運んでもらうような働きかけを行う。情報発信については情報を見聞きしてもらう。対象は感謝度が高い人。市民の約半数。

✧　ターゲット④：魅力あると思っているが、まちづくりには興味はない。
応援の方法の紹介、熱を伝える場作りへの参加の働きかけ、SNS のフォローから取組みに興味を持っていただく。推奨意欲度の上半分の数値を付けてくれた人。県外ではアンケート回答者の約 3 割に当たる。

●【事務局：いろあわせ】②推進体制はあくまで素案であり、皆様のご意見をお伺いしながらどのような形が良いか模索したいと考えている。

●【宗田委員】彦根未来フェス、イベントが実施されればそれを中心にいろんなことが展開されていく。今の推進体制だと、彦根未来フェスが盛り上がるような体制にはなっていないように感じる。例えば先程例に出ていた佐和山の活性化をしている人が運営メンバーに入っているとか、そういう具体的に誰が中心にするのかを考える事で、その人が活動しやすいような形を模索することができるのではないか。

●【事務局：市役所】※③ターゲットについての説明

●【事務局：いろあわせ】推進会議のメンバーのイメージとしては①に当たる人たちを中心と考えています。

●【宗田委員】ターゲット④、③の中に冷水を浴びせかける人もいるはず。これをどうやって止めるかは重要で、具体的には①の人もみんなで守ってあげる仕組みも作らないといけない。ただでさえ少ない人数が

減るかもしれない。また、応援をしてくれる人と、批判をする人というのは、同じ層の人であること。内側にいる熱のある人がもしかしたら敵に回るかもしれないってことは考えて置いたほうがいい。
●【宗田委員】東京から出て、地方に住む人が増えている。その文脈で彦根にいる僕らの方が、東京の人の意見を聞くよりも実は幸せを知っていることも十分にあり得る事を、①や②の人に知ってもらって、自信を持ってもらえるといいと思う。
●【事務局:いろあわせ】一つの批判にみんなが反応するのが人間の心理。それ以上にいい人意見を取り入れるような仕組みができると良いと思います。
●【柴田委員】推進体制を見てまず思う事は、オープンではないと感じた。市民ワーキング会議に集まった人と、市役所だけ。その周りの人も居るはずなのに、内と外をはっきりと分けているように感じる。市民ワーキングのメンバー＋αという書き方をしているが、今回集まった人はあくまでもワーキング会議を 5 回してもらうために集まった人たちなので、来年「(仮称)彦根市シティプロモーション推進会議」を作る場合には、改めて公募が必要だと思う。
●【事務局:いろあわせ】そのとおりに考えています。
●【柴田委員】市民活動センターがあまり機能していない理由
活発にいろんなことをしている人は、自分がやってることを頑張りたいと思っている。そうした時に自分の活動にしか余裕が無いような人ではなくて、活発にやっている人を応援したいひとを集めなければいけない(自分の活動だけではなくて、シティプロモーションをやりたい人を集めるべき)。
●【丸山委員】実施の運営主体はだれなのか？
●【事務局:市役所】市民ワーキング会議＋αにあたる個別のメンバーです。
●【丸山委員】ならば柴田委員の言うとおりで、自分のことだけをやりたいわけではない人を集めないと崩壊する。
●【事務局:いろあわせ】各務原市の戦略プランの中にも推進体制についての記載がある。シティプロモーションサポーターズクラブというものを作って、市民活動を積極的に応援できるようにしている。メンバーは名指しで指名されてコアメンバーになっており、市はお金や広報の面で支援している。その形を参考に考えていました。
●【丸山委員】批判を無視できるような仕掛けを考えないといけない。何をやろうとしても批判は必ずあるし、なにかをやりたいという意見を大切にして、その人を守れるように仕組みを作ることで、多様な意見が潰れないで済むと思う。運営母体に市が絡むと、批判的な意見を拾ってしまうのでは無いか。

―――休憩 5 分―――　※ 宗田委員　途中退席
●【丸山委員】クラウドファンディングは便利。お金が集まるものと、集まらないものがはっきりと分かれるし、もし集まらなかったとしてもその経験が資産になる。また私の立場としてはガバメント・クラウドファンディングには反対。なぜなら市が間に入る事によって、支援が集まりそうにない企画について、はじめから排除してしまうから。
―――休憩終了―――

●【馬場委員】②推進体制を見た時の、協定という言い方は「協力」ではだめなのか。また彦根市という言葉が表の別の場所で 2 箇所書いてあるので、関係性が見え辛い。もうすこし整理されるといい。

●【橋本委員】彦根市が運営主体ではない場をつくろうとしていることはわかった。さらにどういう人が集まって欲しいのかが見えてくると良い。また彦根市も「（仮称）彦根市シティプロモーション推進会議」の中に入っているが、まずは彦根市職員の意識を変えていくことも必要だと思うし、その取組みが見えると良いと思う。
●【事務局：市役所】オレンジの枠の中（市民ワーキング会議メンバー＋α）は、再度公募し直したときにまた来てくれるだろうと希望的に考えているので、自動的に（強制的に）移行するわけではない。ただ、今すでに市民ワーキング会議に参加してくれてる人には熱があり、その熱を下げないようにつぎに繋げたいとは考えている。
市役所の連携協定については、プロジェクトにあわせて関わる課と繋げて連携していく。
●【上田委員長】市の職員の熱を高めるための取り組みについては？
●【事務局：市役所】市役所全体にシティプロモーションマインドを広めるような取組をしたいとは考えているが、実際に何をするかは決まっていない。

●【柴田委員】シティプロモーションの一環として、役所の１階の使い方を提案できないか。会議という枠組みではなく、休憩に行ったら（市職員と）話ができるような場所と仕組みが欲しい。
●【橋本委員】例えば喫煙室のような空間はいろんな職種、年齢の方が集まって話をしている。そういう場所がタバコを吸わない人も含めてあればよいと思う。
●【事務局：いろあわせ】今のところ、推進会議の中には市職員を入れるという発想はないが、それは必要であるかは是非一緒に考えたい議題です。また連携協定という書き方をしている理由は、市民活動に対する市のお墨付きを与えるようなニュアンスを伝えたいから。
●【馬場委員】市職員だけで勉強会をしていても、おそらく上手くいかないだろうと思う。それならば是非一緒の枠組みの中で支援することを考えて欲しい。
●【柴田委員】市職員が、市民と話をするということに慣れていかなければいけない気がしている。市民と話をしていると「これをどうにかして欲しい」と課題を突きつけられるイメージがあり、市民と話をするのが苦手という知り合いがいる。それでも一緒のテーブルで議論をする中で、最初は「市役所の人なんだから」って言われるけど、そのうちに市民側も市役所職員は万能ではないことに気がついて一緒頑張っていきましょうとなると思う。

●【松井委員】社協のなかでも〇〇委員会を作るが、あまり主体的に取組む人がおらず、うまくいかないことが多い。「（仮称）彦根市シティプロモーション推進会議」でも同じことが危惧されると思います。推進会議の中に熱がないと、協働はなしえないと思う。一緒にいてくれた方が協働の雰囲気が出るし是非、市職員も参加したほうがいいと思うが、ただあまり市役所職員としての世話焼きをやり過ぎないように気をつけた方が良い。

●【小椋委員】シティプロモーション推進課はずっとあるのか？もし担当者が変わったから、振り回せるような事になってしまうと、また別の意味でしがらみができてくるのではないか。
●【事務局：いろあわせ】そういう意味でも、一定は自走できる形にしたほうがいいだろうなと考えています。

●【事務局：市役所】しっかりと戦略と仕組みを作ることで、もし担当者が変わっても続いていけるようにしたい。行政からも「（仮称）彦根市シティプロモーション推進会議」に参加する職員が増えればよいと思う。
●【事務局：いろあわせ】今現在、市民ワーキング会議に参加している市職員は、個人としての意見も言ってもらってると感じている。行政的にこれは言ってはいけないなどと考えて発言を控えるようなことはしてないと思う。
●【松井委員】それは立場の違いではないかと思う。個人として入ることと、行政として入ることは全く違うし、それぞれの支援の形がある。
●【柴田委員】最初は肩書はなしにして関わっていく方がいいのかなと思う。責任のない発言の方が面白いものが出てくると思っているので。
●【丸山委員】ステージの違いはあるかもしれない。まずアイディアを作る時は、肩書は不要。一方で具体的な形にする時は行政のリアルな話をしたほうが、形になっていく。
●【事務局：いろあわせ】ここまでの話を聞いて、少数精鋭で責任持ってやる場と、今やってるような雰囲気のオープンな場が必要ではないかと感じた。

●【事務局：いろあわせ】（柴田委員に対して）閉じた場にしたくないということと、オープンな場を作るってことは同時にできるのか？責任の所在をはっきりとすることは難しくなるのではないか。
●【柴田委員】推進会議はオープンであったほうがいい。そのなかに未来フェス実行事務局ができてくるとか、推進会議全体の運営メンバーは別途必要。また市民活動ではなく、パブリックな場にしないと彦根市民は来ないのではないかと感じる。「彦根市内とは、芹川からこっち派」の人がいる中で、〇〇さんが参加しているシティプロモーションでは参加してくれる人が少なくなるのでは無いかと危惧します。
●【事務局：いろあわせ】ある意味で矢面に立って、批判を浴びながらも、チャレンジなことをしていきたいと考えている。

4. 事務連絡等

－ 彦根市シティプロモーション戦略プランの最終報告書を、世界に発信していくつもりで作成してまいります。今回は一旦の作ったものでしかないので、また新しく作っていきます。

●【上田委員長】次回の第 5 回策定委員会が最終となる。戦略プランは年明けぐらいには作成いただき、次回確認します。推進体制は作り直すこと。

5. 次回開催

次回は 2019 年 1 月 25 日（金） 13：30～
場所は大学サテライトプラザ彦根（C 教室）